



令和

幡羅遺跡ファンクラブ会報

ハラ君通信



天皇陛下の即位のお言葉は、国民の幸せと世界の平和への願いでした。

令和元年（2019年）12月12日発行 よろしく令和&幡羅遺跡シンポジウム特集第6号☆

チーム郡家で「梅花の宴」

新元号「令和」（れいわ）になりました！元号の出典に「古代の役人たちの宴会」がかかっているのは、驚きでした。日本最古（およそ1300年前、奈良時代）の歌集「万葉集」の「梅花の歌三十二首」序文、【初春の「令」き月 風は「和」らぐ】と漢文で記された部分から引用されました。

大宰府の長官だった大伴旅人は、天平2年（730年）に同僚の役人や友人を招いて、唐（中国）から伝わった白梅を愛でる宴を開きました。当時の流行の先端で、知的でおしゃれな宴だったようです。（大宰府は、古代、筑前国に設置され〔今の福岡県太宰府市〕、九州の防衛や外国との窓口となった重要な役所です。）

幡羅官衙遺跡でも、国司をもてなす盛大な宴が行われていたことが、発掘調査からわかっています。幡羅遺跡ファンクラブは、古代の役人の宴会や料理を研究しているので、とても興味深いですね！



「令」しく（美しく）
平「和」な時代になる
ようにとの願いが
込められているね



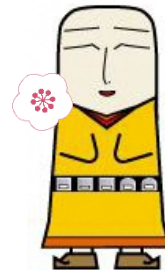
美濃国武義郡家
（岐阜県関市）
ひろまるくん

英語で言うと、
Beautiful harmony
（美しい 調和）



上野国
新田郡家
（群馬県
太田市）
ななひこ
七彦

チーム郡家も
ビューティフル ハーモニーで
いきましょう!!



武蔵国幡羅郡家
（埼玉県深谷市・熊谷市）
ハラ君



万葉集にでてくる梅は、すべて白梅と言われているよ

白梅の散るさまを「雪のようだ」と表現したり、梅の花の枝を髪に挿したり、花びらをお酒に浮かべたり、とても雅で、すてきですね。



上野国佐位郡家
（群馬県伊勢崎市）
うねめ
采女ちゃん

上野国佐位郡家
（群馬県伊勢崎市）
ハッソー君

<第5回活動報告>

関東の明日香村～幡羅官衙遺跡群～
国史跡指定記念シンポジウム

「飛鳥時代の役所と地域社会」が開催。

県内外から約 480 人もの方々が来場。
ハラファン会員 29 名がボランティアで、
お手伝いしました！

深谷市民文化会館 大ホール
2018年(平成30年)11月10日(土)

いよいよ国指定後初のイベント、シンポジウムです。前回2011年に「幡羅遺跡シンポ」が開かれているので、今回は2回目です。

会場の入り口でハラ君がお出迎え



私たちには、運営ボランティアという重要な任務があるので、ドキドキです。「舞台設営」「受付」「周辺案内」「場内整理」「駅からの案内」「非常口誘導」「めぐり」と、役割分担が決まっているので、


担当の職員さんの指示のもと、お手伝いです。

さて、皆さんのボランティアぶりを紹介します。まず「舞台設営」係。前日、体調が悪かった石川正夫さん。今日は、朝起きたら咳も出てなかったし、大丈夫。無理はしない、ということで、来て下さっています。優しい方なので、自分の身体より、ボランティアの事を心配して来てくれたんですね。本当にありがとうございます。一緒に、巨大な横に長い板に、シンポのタイトルを印刷した紙を貼り付けます。吊り上げた看板を見上げると、一気にシンポジウムらしくなりました。

「受付」係は、来場者の対応で1番忙しそうです。確か2011年のシンポの時も受付をしていた方もいるので、任せて安心ですね。

「周辺案内」係は、来場者からの質問に答えます。どんな質問がくるかわからないので、大変です。歴史能力検定を受けるという9才の男の子が、勉強のためにお母さんと来ていたそうです。将来は、歴史博士ですね！

「場内案内」係は、会場の中で、来場者の方々に座席に誘導します。清水さんが、「前の空いているお席からすわって下さい」と、てきぱきと声かけをしていました。

「駅からの案内」係は、深谷駅前、「深谷市民文化会館はこちら」という  矢印の紙を持って、ご案内しました。穴原さんが「駅前で、シンポジウムに行く人に、どこから来たか聞いてみたら、深谷市内の人が多かった」と話していました。

「非常口誘導」係は、地震など災害が起こった時に、出口に誘導するため、交替で待機しました。また、車いすの方が出入りする時にドアの開け閉めをしました。

「めぐり」係は、舞台の上で進行にあわせて、プログラムの束を一枚ずつめくりまわす。480人の来場者の前で、堂々と落ち着いて仕事していたので、カッコよかったです。

「飛鳥時代の役所と地域社会」プログラム

「めくり」「非常口誘導」係など、シンポの時間内に仕事がある方々は、舞台袖で待機したり、一部発表の内容が見られなかったりする状況もありましたが、責任を持って仕事をして下さって、ありがとうございました。

どの仕事も大事で、大変な仕事でした。不慣れで至らないところもあったと思います。来場者の方々や職員の方々に許して頂き、裏方という貴重な経験をさせて頂いたことにとっても感謝しています。ハラファン会員 29 名もの方々が力を貸してくれて、無事シンポジウムを終えることができました。本当にありがとうございました！

では、シンポジウム

『飛鳥時代の役所と地域社会』の発表を見てください

「古代国家の成立と東国の地域社会」 宮瀧交二さん（大東文化大学）
「飛鳥時代の幡羅官衙遺跡」 知久裕昭さん（深谷市教育委員会）
「飛鳥時代の西別府祭祀遺跡—湧泉祭祀場—」 吉野 健さん（熊谷市教育委員会）
「飛鳥時代の橘樹官衙遺跡群について」 栗田一生さん（川崎市教育委員会）
「飛鳥時代の西下谷田遺跡」 清地良太さん（宇都宮市教育委員会）
「飛鳥時代の御殿前遺跡-豊島郡衙創建の様相」 中島広顕さん（北区飛鳥山博物館）
「飛鳥時代の建物を復元する 復元、館の主殿」 田中広明さん（埼玉埋蔵文化調査事業団）

基調講演

「古代国家の成立と東国の地域社会」
宮瀧交二さん（大東文化大学）

TV「プラタモリ」大宮編に出演なさった、大宮愛あられる宮瀧交二さんの発表です。

飛鳥時代は、律令国家（体制）が始まり、成立していった時代です。大化の改新（天皇中心の国をつくるための政治改革）が 50 年くらいかかって行われたようです。中央には都が造られ、地方では、古墳時代から各地の豪族が支配していたところに「評」が置かれ、後に「郡」に変わりました。「評」や「郡」は今の行政区分では『市町村』にあたります。評（郡）をいくつかまとめて「国」を造りました。「国」はだいたい今の『都道府県』にあたります。さて、評（郡）はいつできたのでしょうか？宮瀧さんによると、文献から 649 年ごろに「評」が誕生したことがわかるそうです。史料では、この頃の「評」の記述を、後世の人が「郡」に、書き換えてしまったものがあるそうです。歴史の謎ときは難しいですね。

飛鳥時代 593 から	7	645 (大化1)	乙巳(いっし)の変	大化の改新始まる。
	世紀	649 ごろ	「神評」の記述 文中では、神「郡」 (常陸国風土記 713年)	孝徳天皇の「 ^{つちのととり} 己酉」 の年に神評が置かれ たと記される。
			「天下立評」の 記述(皇太神宮 儀式帳 804年)	孝徳天皇の御世に天 下に評が立(建)て られたと記される。
奈良 時代	8	701	大宝律令の制定	「評」から「郡」へ
	世紀	710	平城京に遷都	

木簡は削りくずも重要！ゴミではない！

藤原京から出土した木簡の削りくずの中に、「原評」（幡羅郡の前身）と記してあるかもしれないものが 1 点あるそうです。木簡は、表面を削って再利用するので、削りくずでも文字が読めるものがある、というのは初めて知りました。武蔵国幡羅郡に、先行して原評が存在したことを証明する資料となるそうです。ゴミではなくて、宝物ですね。

埼玉県北部は人口密集地域だった！

武蔵国の中で、「原評」など早い段階で評が置かれたのは、現在の埼玉県北部だったそうです。この地域は古墳も多く、有力な豪族が多く存在してい

たようです。人口密集地域(=大都会?)で、武蔵国府が置かれてもいらい重要な場所だったなんて、おもしろかったです。

「飛鳥時代の幡羅官衙遺跡」

知久裕昭^{さん}(深谷市教育委員会)

ハラ君とふっかちゃんと渋沢栄一翁の「生誕地」深谷市から、知久さんの発表です。

幡羅官衙遺跡は、武蔵国^{むさしのくに} 幡羅郡家の役所跡です。7世紀後半に楯引台地の端っこに、妻沼低地を見下ろす形で、成立しました。

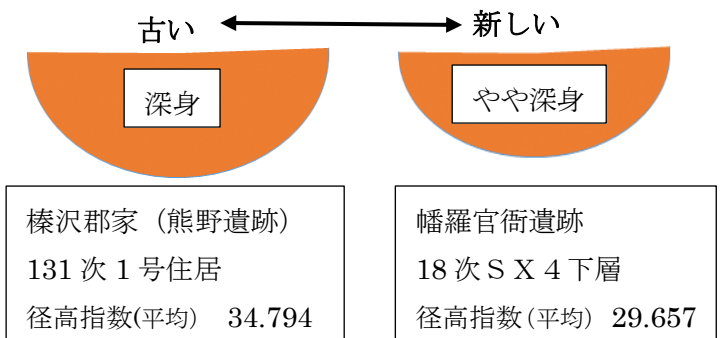
幡羅郡は、7つの「郷」と1つの「余戸」に分かれていたそうです。「上秦郷」「下秦郷」の「秦(はた)」という字は、渡来系氏族の「秦氏」に関係する人々が多く住んでいた可能性があるそうです。

「ハラ評家」が先か「榛沢評家」が先か

「評(郡)家」はおよそ現在の「市役所」に相当しますが、現在の「深谷市」にはなんと郡家跡が2つもある！「幡羅郡家」と「榛沢郡家」です。(埼玉県内で古代の役所の所在地が確定しているのは、この2郡だけです。共通するのは、「正倉跡」が発見されていることです。税(稲)を保管するための施設である正倉は最も重要で、「何はなくともまず倉庫！」だからです。)

ハラ君が先か、ふっかちゃんが先か。答えは簡単です。我らがハラ君の方が、ふっかちゃんよりゆるキャラデビューが先です。でも郡家の場合はどうやって比べたらいい？ここで、違いの分かる

知久さんによると、(以前伺ったように)出土した土器の形で、比べるんだそうです。暗文^{あんもんつき}環という都の方から運ばれた土器で比べます。両方とも7世紀後半の、評家の成立時期の土器です。



(総高÷口径×100=径高指数)

土器の形にも時代の流行があって、7世紀後半~8世紀前半の暗文環は、段々と浅くなっていくのだそうです。つまり熊野遺跡の方が深身なので、榛沢評家の方が先で、幡羅評家が少し後に成立した可能性が考えられる、というわけです。

「ハラ評家はいつ成立？」

土器の形の分析などから、7世紀第3四半期(650年~675年)まで成立時期が絞り込めて、その中でも終わりの方に評家が成立したということです。その後、7世紀末ごろには、幡羅郡の役所として整備されていくということです。「飛鳥時代の幡羅官衙遺跡」の周辺は、人口も多く、とても活気がある場所だったんでしょうね！

「飛鳥時代の西別府祭祀遺跡」

吉野 健^{さん}(熊谷市教育委員会)

ラグビータウン熊谷から、吉野さんの発表です。

幡羅官衙遺跡群は、深谷市と熊谷市にまたがり、郡役所、祭祀場、寺院、3つそろって「ONE TEAM」。「西別府祭祀遺跡」は、熊谷市にある幡羅官衙遺跡群の祭祀場です。祭祀は、ハラ評家が

成立したのと同じころ始まります。多量の石製模造品と一緒に出土した、わずかな土器からわかるそうです。(土器は時代のものさしですね。)

祭祀遺跡には、わき水がぼこぼこした跡があるそうです。古代の人々は、水神様は、常にわき水の所にいらして、多くの(収穫の)恵みをもたらすと同時に、怒りにふれば(洪水などの)災害をもたらすと考えていたようです。

祭祀行為としては、わき水があった河川を見おろす台地の先端に祭壇を設け、日々の生活の安定を水神様に祈り、お供えとして、祭祀具(石製模造品など)を投げ入れたと考えられています。

古墳時代に地元の豪族によって行われていた河畔祭祀が、西別府祭祀遺跡に引き継がれ、その後幡羅郡家が整備される頃には、木の祭祀具を使わない、(幡羅郡家独特の)土器を使った仏教的な律令祭祀に変わっていくということです。

祭祀は火を使う？昼行う夜行う？

西別府祭祀遺跡と同じ福川流域の幡羅郡域の事例(一本木前遺跡)をみると、火を使った祭祀もあるようです。私は、わざわざ火を使うのだから、夜に祭祀を行う可能性もあると思いました。

シンポが終わった後、吉野さんに質問してみました。「西別府祭祀遺跡では、祭祀は昼でなくて夜行われていた可能性はありますか？」吉野さんは「今のところはわかりませんが、可能性はありますね。」それで私は、「ああ、でも古代の役人の仕事は、夜明けとともに出仕して、お昼に仕事が終わるんですよ。だったら、夜中に仕事なんて時間外勤務ですから、夜の祭祀はないですね？」すると、吉野さんは「夜に祭祀を行っていたのであれば、時間外でもそういう勤務の人もいたかもしれないですよ。」と答えて下さいました。ありがとうございました！

「飛鳥時代の橘樹(たちばな)官衙遺跡群について」

栗田一生さん(神奈川県 川崎市教育委員会)

川崎市は、神奈川県だけ、(相模国^{さがみのくに}じゃない)武蔵国^{むさしのくに}。栗田さんの発表です。

橘樹官衙遺跡群は、武蔵国 橘樹郡の役所跡である橘樹郡家跡と、寺院跡の影向寺(ようごうじ)遺跡から構成されています。多摩丘陵のてっぺんの高燥で平らな場所に、多摩川とその沖積低地を見下ろすように位置しています。丘陵の南側には古代の道路、中原街道が通っています。2015年(平成27年)国指定史跡になりました。)

みやけ 屯倉から評家へ

古墳時代(6世紀はじめごろ)橘花屯倉(みやけ)という大和政権の直轄地が設置され、それが、

飛鳥時代(7世紀中ごろ~終わり)に橘樹評家^{たちばなひょうか}に変わっていったようです。興味深いのは、評家^{ひょうか}が出来るころ、不明遺構(柱掘り方はみられず、方形に溝が巡る)が規則的に配置されていて、評家を造るのに関係のあった施設ではないかということです。朝鮮半島由来の「大壁(壁立ち)建物」に似ているそうです。「続日本紀」768年の記事に渡来系氏族が橘樹郡にいたことが書かれていますので、橘樹屯倉を設置する時に、先進的な技術をもった渡来人が派遣されて来て、そのまま土着した可能性があるそうです。

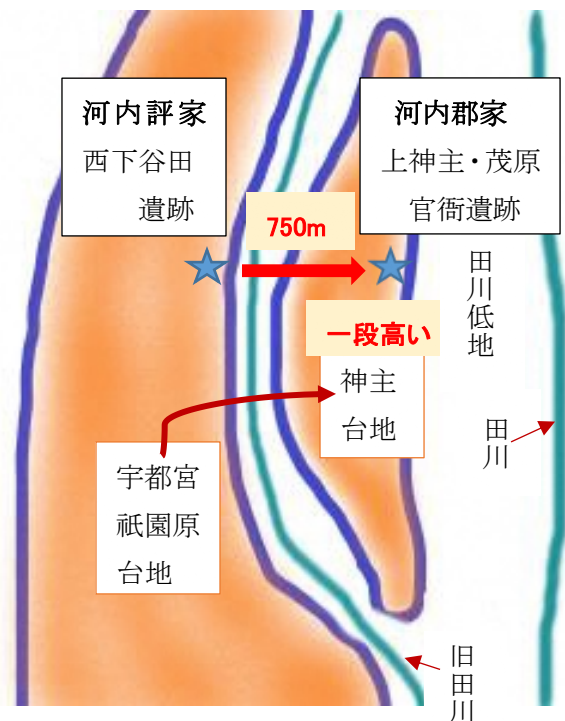
7世紀終わりごろには、正倉などの郡役所に関する建物が整備されていったということでした。

「大壁」建物は、関東では珍しい建物だそうで、もっと発掘調査が進んで、色々なことがわかったら面白そうですね！

「飛鳥時代の西下谷田（にししもやた）遺跡」

清地良太さん（栃木県 宇都宮市教育委員会）

ギョーザの町、宇都宮から清地さんの発表です。西下谷田遺跡は、下野国に最初に設置された評家です。東側に約 750mの所に、下野国 河内郡家である国指定史跡、上神主（かみこうぬし）・茂原（もばら）官衙遺跡があります。



郡家が移動した！

西下谷田遺跡は、評家として（豪族の居宅のような性質も持ちながら）7世紀第3四半期（650～675）後半から7世紀第4四半期（675～700）前半に成立したそうです。面白いのは、評家が郡家になる時、一段高い神主台地上の、東に直線で750mの場所に引っ越すのです。でも、評家を終わりにしてしまうのではなくて、門を立派にしたり再整備して、機能を残したまま、郡家と一体になって続いていくのです。国司が常駐する施設だった可能性があるそうです。

河内郡家（上神主・茂原官衙遺跡）は、田川低地を見下ろす神主台地の端に位置し、眺めも良く（高燥で、水害に合いにくい台地の端に郡家を造るのは、幡羅郡家に似てますね！）東方には、（推定）東山道が通っていたようです。

また、西下谷田遺跡は、新羅土器が多数（12点も）出土したことで有名な遺跡です。渡来人（新羅人）がいたことを示しています。「日本書紀」の687年、689年、690年の記事に、「下毛野国へ新羅人を中央から移住させた」という内容の記述があります。国家的規模で渡来人移住政策が行われていて、河内郡は渡来人を多く受け入れていたようです。

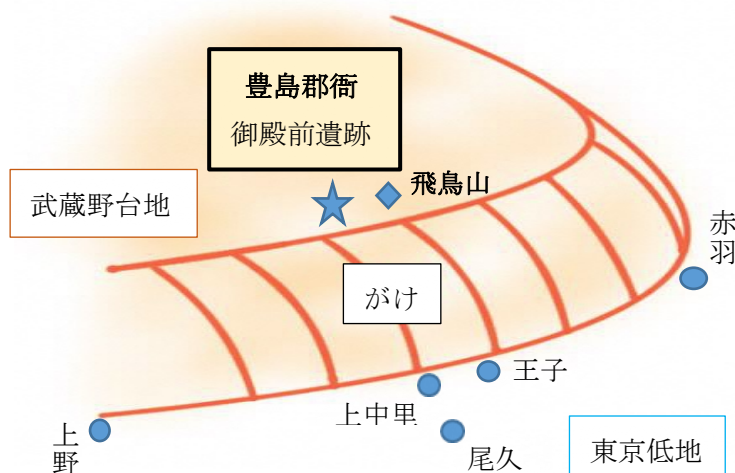
「飛鳥時代の御殿前（ごてんまえ）遺跡

-豊島郡衙創建の様相

中島広顕さん（東京都北区飛鳥山博物館）

飛鳥山は、渋沢栄一の住まいがあったところで、公園になっていて、桜の名所です。公園内にある飛鳥山博物館から、中島さんの発表です。（隣は渋沢史料館です。）御殿前遺跡は、武蔵国 豊島郡衙（郡家）の役所跡です。1982年（昭和57年）から発掘が始まり、翌年秋には「都内初の郡衙跡」とスクープで報じられました。（中島さんが25歳の時で、遺跡の全体写真を撮るためにセスナ機に乗せてもらって、自分で写真を撮ったそうです。）

豊島郡衙は、武蔵野台地北東端の台地上にあり、赤羽～上野間の崖線上の真ん中あたりにあります。



豊嶋郡大領大伴直宮足書

標高は、20mで、東京低地を見下ろしています。また、真東に15km(約30里 古代の1駅分)の所の下総台地上には下総国府があります。豊島郡域は、現在の東京23区のうち北区・豊島区・板橋区・文京区・荒川区・台東区・千代田区・練馬区・新宿区に相当する範囲です。(大都会東京の中心地!)豊島評衙(評家)が出来る前(6世紀~7世紀前半)は、北区周辺は、崖線上にそっていくつかの古墳があり、飛鳥山にも古墳群がありました。官衙の遺跡が出てくるのは、7世紀第3四半期の660~670年代で、竪穴建物や倉庫群(ます倉庫ですね)円形有段遺構(祭祀に関係?)がありました。680年代には、郡庁や館、井戸が造られ、連房式鍛冶工房が官衙の整備に関わっていたようです。

「連房式鍛冶工房」は、複数の鍛冶炉を同時に使い、鉄器を集中的に生産することができます。官営鍛冶工房の最も古い段階のもので、同時期の例では、奈良県明日香村の官営工房を始め、深谷

市の榛沢郡家(熊野遺跡)などがあります。

面白かったのは、2010年(平成22)に平城宮東方官衙地区から発見された木簡の話です。「豊嶋郡大領大伴直宮足書」と判読でき、この方は、「続日本紀」の724年の記事に出てくる人物で、豊島郡の郡司だったようです。724年、陸奥国に多賀城ができた時に、多くのお米を寄贈したということで、大出世した方なのだそうです。なんと11階級も上がって貴族に準ずる階級(ほぼセレブ)まで昇りつめたなんて、すごいです。お米は、今のお金と同じ。1873年(明治6)に「地租改正法」ができて、税をお米ではなくお金で納めることが決まるまで、ほんの146年前までは、古代からずっとお米はお金の代わりをしていました。それだけ、多くのお米を寄贈することは立派なことだったのですね。 ※実物大イメージ (縦96mm×横18mm)



この木簡は案外ちっちゃいですね

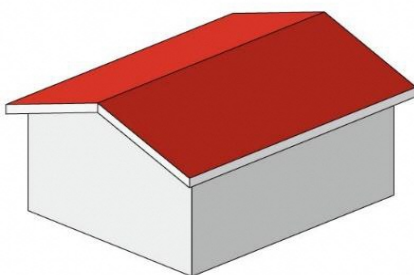
「飛鳥時代の建物を復元する
復元、館の主殿」
田中広明さん(埼玉埋蔵文化調査事業団)

熊谷ラグビー場内(北島遺跡25次)の発掘を行った、埼玉埋蔵文化調査事業団から、田中さんの発表です。(北島遺跡からは、幡羅郡家につながると思われる道路跡が発見されています。)

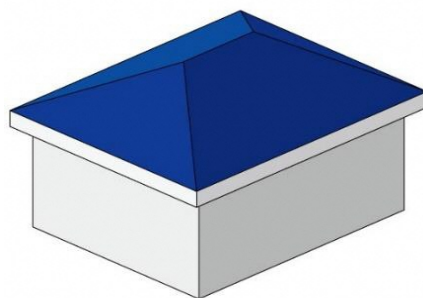
幡羅官衙遺跡で、国司をもてなす宴会が行われていた「館」(四面廂建物)とはどういった建物なのでしょう。発掘調査でわかることは、柱穴の数や配置、大きさだけです。

柱穴から、屋根の形を予想し、復元できることがすごい!

参考にするのは、法隆寺(607年ごろ完成)など、古代の現存する建物だそうです。四面に廂がある建物は、格式が高く、貴族の住む寝殿造りの主殿に似ているそうです。パソコンのソフト3DCADを使い復元図を描いていきます。私は知らなかったのですが、屋根の形は色々あって、切妻(きりづま)・寄棟(よせむね)・入母屋(いりもや)などがあります。



切妻屋根

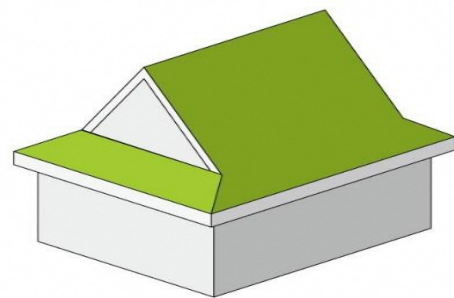


寄棟屋根



四面廂は、廂が4方向ある状態。廂の下は、屋内スペースになっている。

田中さんによると、古代の建物は、くぎを使わないで、木を組んで建てるそうです。実際に木を組んで作りながら考えていくと、不自然な組み方はできないので、どこがまずいのかわかるそうです。切妻にしては、屋根の頂点を支える柱が（柱穴が小さいことから）貧弱なので、違う。寄棟にしても、（柱穴の配置からして）屋根の頂点を支える^{つが}束（垂直におく木）が身舎の^{はり}梁（横木）上に置けないということで、これも違う。それで、入母屋なら木を実際に組むことが出来るので、入母屋屋根だということが論理的にわかるということです。3DCAD で描かれた館の主殿の透視図は、とてもリアルで、こんなに豪華で、カッコいい建物だったのか

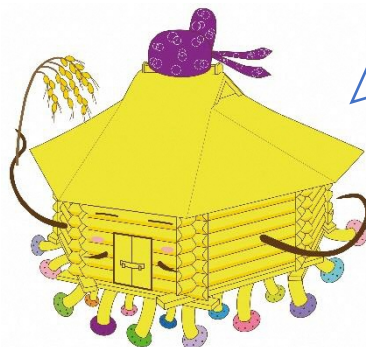
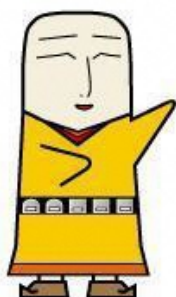


入母屋屋根

（シンポ予稿集 P57 参照）と感心してしまいました。国司の方々にも喜んでいただけたのでしょうか。今度から、寺院の屋根を観察するのが楽しみになりました。（ハラファン会員の高木さんは、模型を作るのが上手なので、館の主殿（四面廂建物）の復元模型も作って欲しいです！）

ハッソー君は入母屋屋根だね！

新しい事がわかるとゆるキャラの形も変わるんだね。この屋根の形も格好いいね。



そうだよ。初めは、屋根は正八角形の^{ほうぎょうづく}宝形造りだったんだ。でも、柱穴の配置から再検証して、少し変わった形の入母屋屋根に変更したんだ。

+

飛鳥時代の役所は、律令体制が成立していく過渡期のものでした。この時期に、地方でも評が造られました。評のなりたちは、色々でしたね。



共通点もあります。郡家は、台地の端など、少し高い場所に造っているようです。民衆が低地から壮大な郡家の建物群を見上げたら、その視覚効果は絶大。民を治める律令国家の権威を感じずにはられません。



日本は古来、災害の多い国。台地上は安定して地震にも強いし、高燥で水害にも合いにくい。自然の地形を利用しているんだ。

郡家の遺跡ってほんとにおもしろいですね。シンポジウム勉強になりました。ありがとうございました。



<ハラ君通信編集部>

☆ハラ君（編集長）☆S（紙面担当）
☆O（幡羅遺跡 F.C. 幹事）☆U（同幹事）